

ラムを得た。

〔結果〕 1) 未治療の悪性腫瘍では82%の陽性率を得た。ことに未治療の上頸癌18例では、94%に強い陽性像をみとめた。一方、16例の慢性副鼻腔炎では50%に軽度の Ga の取り込みをみとめ、1例のみに強い陽性像をみとめるにすぎなかつた。上頸癌と慢性副鼻腔炎との間には明らかな差をみとめた。

2) 耳下腺腫瘍では悪性腫瘍で80%，良性腫瘍でも75%の陽性率が得られ、良性・悪性の鑑別は Ga スキャンではできなかつた。

3) 触診上、頸部リンパ節転移をみとめた24例中の9例に Ga シンチグラムで陽性像をみとめた。Ga の集積は母指頭大以上の転移に限られ、触診以上の情報は Ga スキャンからは得られなかつた。

4) 放射線治療により Ga スキャンは陰性化あるいは稀薄化し、照射後の手術標本では、腫瘍細胞の消失・変性をみとめた。Ga スキャンは治療効果をある程度反映するものと考えたが、Ga スキャンの陰性化にもかかわらず、腫瘍細胞の変性をみとめない1例もあり、この点に関しては今後症例を重ねて検討してゆきたい。

## 29. Carcinoembryonic Antigen (CEA) の Radioimmunoassay とその臨床応用における問題点

村井 隆夫 正木 盛夫

粕川 札司

(福島医大・二内)

斎藤 勝

(同・RI)

Carcinoembryonic Antigen (癌胎児性抗原、CEA) は癌関連抗原の一つと考えられ、Radioimmunoassayによる血中CEA測定は癌の免疫血清学的診断法の一つとして注目を集めている。われわれも Hansen 等の開発した Z-gel 法に基づく CEA-Roche kit を用いて消化器疾患を主体とした各種疾患患者 253 名と健康な成人 107 名で血中 CEA 濃度を RIA 法により測定し、その臨床診断学的意義について検討を加えたので報告する。

健常成人の血中 CEA 値は 2.5 ng/ml 以下 58%，2.5~5 ng/ml 30%，5~10 ng/ml 13% でわれわれと同じ方法で行なった米国の成績に比して日本人では高値を示す例が多く、人種的な差も考えられる。年齢別では加齢と共に CEA 高値を示す例が増加し、健常成人の血中 CEA 値の上限は若年者では 2.5 ng/ml、高年齢者 (40 歳以上) では 4~5 ng/ml にする方が良いと思われる。

各種疾患患者での血中 CEA 値は 2.5 ng/ml を境界に取ると進行胃癌 75%，早期胃癌 22%，大腸癌 88%，良性消化器疾患 51% で大腸癌、進行胃癌では良い成績を示した、また、胰胆道癌でも CEA 陽性率は高値で、従来の検査方法では診断の困難であった点を考えれば臨床応用価値が高いように思われる。しかし、一般良性疾患での偽陽性率が 30% 以上もあり、この点が CEA の臨床応用に際して最も問題となるように思われ改良すべきである。血中 CEA 値は胃癌では癌の進展度に比例して、上昇例が多くなり、高値例では転移を伴い予後が悪い。

## 30. One Step Sandwich 法による CEA の測定の基礎的および臨床的検討

筒井 一哉 佐藤 幸示

(県立ガンセンター新潟病・内)

渡辺 清次

(同・放)

1) CEA リアキットの再現性は intraassay で C.V. 6.3~8.7%，interassay で 10.2~12.4% と良好であったが、希釈試験で直線性が失なわれ CEA のみを特異的に測定していないことが推定された。

2) 健常人 (18~55 歳) 50 例は 1 例が 3.0 ng/ml であったが、他は 2.5 ng/ml 以下であった。しかし非癌患者 237 例中 61 例、25.7% が 2.5 ng/ml 以上であった。従来報告のある疾患の他、高血圧症、糖尿病患者も高いものがあった。これらは加齢と有意に ( $p < 0.01, n = 85, r = 0.692$ ) 相関した。非癌疾患で 5 ng/ml 以上のものはわずか 3.0% であることより、癌診断で意味のある値は 5.0 ng/ml 以上